胡桃館（くるみたて）遺跡出土の建築部材調査

秋田県北秋田市に所在する胡桃館遺跡は、1967～69年にかけて、３次にわたる発掘調査がおこなわれました。その結果、４棟の建物と２条の掘立柱柵列などの下部1.5mほどが、立ったまま出土するという、日本の発掘調査史上、例のない遺構が発見されたのです。これらは火山学の研究成果から、915年に起きた十和田火山（現在の十和田湖を噴出口とする火山）の噴火による土石流で埋もれてしまったと考えられ、埋没建物と呼んでいます。建物の扉板には経を誦んだ墨書があり、これまで部分的にしかわからなかった墨書が、赤外線カメラなどを駆使した2004年の奈文研の調査で、さらに釈読できるようになりました。また、当時刊行された発掘調査の報告書には建築部材の詳細な図面がありませんでした。このような背景から、2007年度には、保管されている部材について、墨書の有無を確認する調査、建築技法を知るための実測調査、建物の建立年代を知るための年輪年代の調査などをおこないました。

調査の結果、新たな墨書資料は発見されず、また年輪年代の調査からは、900年頃に伐採された杉の木を用いていることがわかりました。ここでは多大な時間と労力を費やした部材の調査について述べてみたいと思います。

発見された４棟の建物のうち２棟は、地面に長い角材を置いて（この部材を土居（どい）と称しています）、その上に板を組み上げる板校倉（いたあぜくら）という構造の建物です。土居は長いものは13mにおよび（写真参照）、日本の発掘調査で出土したなかでは、もっとも長い建築部材でしょう。これを現地のみなさんの手を借りて収蔵庫から搬出し、各種の調査と写真撮影をおこないました。１棟の建物の土居４本を出し入れするだけでも、一日がかりです。

また部材をよく見ると、いろいろな痕跡が残されています。大きく分けると、部材を製作するときの痕跡と、建物を使用したときの痕跡に分けられます。

部材を製作するときの痕跡は、表面をチョウナで削った跡、そこをヤリガンナで仕上げた跡、板をノコギリで切った跡、穴をノミで穿った跡などがありました。残り具合のよい部材からは、使った道具の刃幅もわかります。刃こぼれしてしまった道具で削った痕跡もありました。

建物を使用したときの痕跡で驚いたのは、建物の扉の軸を受ける水平材に、扉を開閉させた際に擦れた同心円状の痕跡がはっきりと残っていたことでした。扉は180°開く構造ですが、135°ほどのところがやや凹んでおり、通常はそれほど開けていなかったらしいこともわかります。

部材の調査によって、当時のこの地方の工人が用いた建築技術とともに、建物を造り、使った人びとの息づかいも垣間みえたような感覚になりました。

（都城発掘調査部　箱崎和久）

収蔵庫から搬出した長大な建物の部材